

旦那さま、
誘惑させていただきます！

Momoko & Iwao

永久めぐる

Meguru Towa



エタニティ文庫

目次

プロローグ

第一話 旦那さま誘惑作戦——妻の奮闘

第二話 運命は見合いの席に座ってる？ ——夫の回想

第三話 恋心とは厄介で——妻の悩み

エピローグ

書き下ろし番外編

ある夜の告白

327

321

174

122

11

6

旦那さま、誘惑させていただきます！

プロローグ

教会の重厚な扉が開いた途端、パイプオルガンの音色に包まれた。目の前に広がる光景に、緊張と高揚感が一段と増す。

ゴシック風の堂内は、高い天井からつるされたシャンデリアの輝きと、ステンドグラスから差し込む陽光のおかげで、柔らかな光に満ちていた。

一直線に伸びるパーズロードは、真っ白な大理石。私——佐久間桃子はその上を一步ずつ慎重に歩く。向かう先には、私の夫となる人——久瀬巖さんが待っている。

彼のもとにたどり着くと、伸ばされた大きな手に自分の手を重ねる。手の平に彼の体温を感じると、緊張が和らいだ。彼と一緒に、きつと幸せな未来を築ける。そう思えた。

振り仰げば彼は切れ長の目を細め、柔らかな眼差しを私に向けている。視線が合うと彼は小さく頷いた。

私、本当に結婚するんだ……。しみじみと思う。

けれど、心のどこかでまだこの状況を信じられずにいた。なんの取り柄もなく、特に可愛げがあるわけでもない私が、こんな素敵な男性と結婚できるなんて……

夢ならどうか覚めないで……。なんてベタなことを心の中で祈る。そうして牧師さんの前で結婚の誓約をしたり、指輪を交換したり、結婚証明書にサインをしたりしたのだ。

式や親族との写真撮影が終わって退場するときも、巖さんはゆつくりと歩いてくれる。慣れないドレスとヒールに戸惑う私を気遣ってくれているのだ。組んだ腕も、がっしりしていて頼もしい。

二人並んで式場の外へ向かう。大きく開け放たれた教会の扉の向こうは光に溢れ、眩し過ぎて外の景色が見えない。

ああ、私は本当に……

教会から出て見上げた空は梅雨入り前の快晴だ。その青い空に、ピンクや白や深紅の薔薇の花びらが舞っていた。

一足先に外へ出て待っていた参列者からの「おめでとう！」の声に応えながら、私は教会の外へと続く長い階段を下りた。友人たちからは、祝福の言葉が飛んでくる。

「おめでとう！ 恋人がいるなんて全然聞いてなかったのに、突然結婚するって連絡もらってびびくりしたよ！」

私だってこんなふうにお見合いの末に結婚するなんて思わなかったよ！

「桃子、おめでとう！　すごく綺麗だよ！　ドレスも素敵ね」

ダイエットをがんばったのと、ブライダルエステのおかげだよ！　それと、このドレス、本当にいいよね！　お店で運命的な出会いができたことは、本当にラッキーだったと思う。

「もう！　幸せになりやがれ！」

そう言うなり、籠の中の花びらをいっせいにぶちまけたのは高校時代からの友人。一瞬にして目の前が花でいっぱいになった。

「わっ！　ちよつとやり過ぎ！」

ふわりと漂う薔薇の香りの中、友人と笑い合う。

自分のことのように喜んでくれている友人たちに「ありがとう」と返している間も、なんだか夢の中にいるみたいだった。

もしかしてこれは本当に夢なんじゃないかと、指で手の甲をつねってみた。

あいたたたた………。手袋越しでも意外と痛い。

「どうしたの？　花嫁さんがそんな変な顔しちゃダメじゃない。慣れないヒールで踵でも痛くなった？」

友人の突っ込みに「まあ……そんなとこ、かな？」と曖昧に答えた。

踵かかとが痛いのは事実だったしね。事前に何度か履いて慣れさせていたはずなのに、緊張していつもと違うところに力が入っているのか、残念ながら靴擦れができてしまったのだ。

「でもそんなに痛くないから平気！　それに控え室に戻ったら絆創膏を貼るしね」

答えた途端いきなり体が浮いて、思わず「きゃー！」と悲鳴を上げた。

周りからは、わー！　とか、きゃー！　という歓声が上がっている。なにがなんだかわからず顔を上げると、間近で厳さんと目が合う。その顔の近さに、みるみる頬が熱くなつた。

「いきなり抱き上げて申し訳ない。足が痛いのでしょうか？　このまま抱いていきますから、じつとして。貴女が困っていることに気付かなくて、すみませんでした」

はやし立てる周りの声を物ともせず、厳さんは平然とした態度で私を見下ろす。

「いえ、あの、これは……その……」

「私に抱き上げられるのは怖いですか？」

「いいえ！　全然！」

即答すると、彼はふつと目を細めた。

「よかつた」

ほっとしたような優しい眼差しを向けられて、壊れそうなほど胸がドキドキする。

「では行きましょう」

彼の言葉に私はごくごく頷いた。

嬉しいやら、恥ずかしいやら、申し訳ないやら……いろんな感情が入り混じって声が出ない。

彼の背中の方からは相変わらず歓声が聞こえる。

——ああ、私、なんて幸せなんだろう。

こうして私、佐久間桃子は、久瀬巖さんと結婚して、久瀬桃子になりました。

第一話 旦那さま誘惑作戦——妻の奮闘

シックで品のある扉を前にして、私、久瀬桃子はふうつと小さく息を吐いた。

夢みたくない出来事の連続で、まだ頭がクラクラしている。男つ気ゼロだった私が、お見合いの席で出会った巖さんに恋をしてから約一年。よもや結婚することになるなんて！

夫となった久瀬巖さんは、大きな弁護士事務所の跡継ぎで、とても優秀な弁護士。歳は私より九歳上の三十五歳。いつも穏やかで優しく、大人の余裕に溢れた素敵な人だ。

そんな彼に、お見合いからわずか二か月でプロポーズされたときは、「夢じゃないよね!？」と疑わずにはいられなかった。だって、こんなに魅力的な彼に対し、私は彼と出会うまでお付き合い経験もなかったような、冴えない平々凡々な女子なのだ。

結婚式当日の今日でさえ、これは夢なんじゃないかと何度も自分の手をつねった。

そうして式を終えたあとも、夢見心地のまま披露宴や二次会、三次会が続き、あつという間に一日が過ぎていった。宿泊先のホテルに帰った今はすでに二十一時を過ぎていく。

私たちは今日、明日とスイートルームに二泊する。

そんな豪華な部屋に泊まるなんて生まれて初めてなのでドキドキだ。

それ以外の理由でもドキドキしているけれど、深く考えたくない。考えたら動けなくなりそうだから。深く考えちゃダメだ。

——そう、今日が新婚初夜だなんて……

あああ！ 考えないつもりだったのに考えちゃったじゃない！ 忘れろ、忘れろ、忘れるんだ、私。

厳さんが部屋の鍵を開けるのを見守りながら、内心はすでにパニック状態だった。なにを隠そう私はオタクというやつで、これまで趣味一筋で生きてきた。だから異性とお付き合いしたことがない。そのためこういう状況を経験したことだって、もちろん、なくて——つまり、その……処女なのである。そんな私の焦りを知るはずもない厳さんは、開錠の音とともに私のほうを向いた。ゆっくり見上げると視線が合う。

どうしよう、こういう場合、どうすればいいんだろう!? 黙ってればいいの? それともなにか気の利いたことを言うべきなの? とところで気の利いたセリフってどんなやつ!? なんてことが頭の中を駆け巡る。さあ、どうしたらいい? 為す術もなく、ごくりと唾を呑み込んだ。

「開きましたよ。——どうぞ」

がちがちに緊張している私とは違い、彼の態度はあっさりしたものだだった。

「はいっ!」

声がうわずつたのは、挙動不審で申し訳ないと思う気持ちと、緊張がごちゃ混ぜになっただからだ。

厳さんが小さく笑ったので、恥ずかしくなる。

「緊張してる?」

「ちよ、ちよっとだけ……」

彼の問いかけに答える声はまたうわずつてしまい、ちよっとどころか相当緊張していることが丸わかりだ。

「すっ、少し、部屋の中を見回ってきてもいいでしょうか?」

なにを話せばいいのか見当もつかなくて、とりあえず逃げることを選んだ。部屋を探検している間に緊張がほぐれれば、会話の糸口を見つけられるかもしれない。

「ええ、どうぞ。行つてらっしゃい」

大人の余裕にじませた厳さんの微笑は驚くほど格好よくて、胸がどきんと大きく跳ねた。

彫りが深くて精悍な顔立ち。鋭い切れ長の目と、薄い唇。人によっては彼の顔立ちを強面と評するだろう。見上げるような長身とあいまって威圧されていると思う人もいる

かもしれない。けれど、私は厳さんのことを凜として格好いいと思うし、怖さはまったく感じない。

私の旦那さまである久瀬厳さんは、平凡で、しかもオタクな私にはもったいないほど素敵な人なのだ。

「部屋の中、見なくていいんですか？」

苦笑いとともに話しかけられて、私はようやく我に返った。

「わわっ！ ごめんなさいっ。すぐ行ってきます！」

自分から探検するって言い出したくせに、声をかけられるまでほけつと突っ立ってたなんて恥ずかしい。

私はそそくさと歩き出し、一番初めに目についた部屋のドアを開けて飛び込んだ。そこにあったのは……

とても大きな、大き過ぎるぐらいのサイズの……ベッドだった。

そうか、ここは……

「寝室！」

寝室。寝室だよ、寝る室（へや）と書いて寝室！

用途は言わずもがな、就寝するための部屋ですな！

そして新婚ほやほやの我々夫婦にとって『寝る』と言えば!! 一世一代の大イベント、

初夜ですよねええええ！

緊張をほぐすつもりで部屋の探索（たずね）を始めたのに、これじゃ逆効果だよ！ 一瞬にして全身が強張（こわば）った。かちんこちんで手も足も動かない。私は未経験のまま二十六年来ちゃいましたけど！ それにしたっていい歳をした人間が、こんな思春期じみた反応をするのは、あまりにも情けない。そう思うのに、体は言うことをきかない。

「こんなところで立ち止まってどうしました？」

驚くほど近くから声が降ってきた。

ひゃ！ と口から変な息が漏れたけれど、決して彼が怖かったわけじゃない。

緊張してるのと、物思いにふけているところに突然声をかけられて驚いたせいだ。

もつとも、物思いと言えば聞こえがいいが、実際は色々想像してただけである。

「や、わ、わ、わた、わた、私は、ききききき、緊張なんて……して、な……」

嘘、ウソ。思いっきりしてるよねええええ！

いや、その前に誰も緊張してるかなんて聞いてない！ 勝手に暴露（ばつろ）してどうする。

内心で思いっきり突っ込みつつ、厳さんが怒ったりしないかなと不安になる。

厳さんは温厚（ぬくも）な人だけど、こんな見え透いた嘘をつかれたら腹を立てるかもしれないじゃない？ そう思いながら、恐る恐る彼の言葉を待つ。

が、声はかからなかった。その代わりに彼の大きな手が後ろから両肩に置かれる。包

み込まれた肩口がじわりと温かくなる。

「安心してください、桃子さん。私は貴女に無理強いをするつもりはありませんから」
背後から私の耳元に顔を寄せ、厳さんは優しい声でささやいた。

「だから、そんなに緊張しないでください。ね？」

なだめるような口調が私の頭にしみこんで、焦りがすうっと消えていった。

彼の声は魔法みたい。

「ごめんなさい。私、初めてだからこういうとき、どうしたらいいのかわからなくて」
初夜だのなんだのと一人で意識しては、勝手に取り乱す。そんな自分がひどく幼稚に
思えて恥ずかしい。

「桃子さん、大丈夫ですよ。落ち着いて。式や披露宴を終えたばかりで疲れたでしょ
う？」 ちよつとここに座って休みませんか？」

彼に諭され、広いベッドの端に腰を下ろした。並んで座った厳さんが自然な仕草で私
の肩を抱き寄せる。彼の匂いが鼻腔をくすぐり、安心と緊張が入り混じった不思議な気
持ちが湧いた。

肩に回された腕の温かさが心地よい。

この雰囲気を壊すのはもったいないけれど、私にはどうしても聞いておきたいことが
あった。

「厳さん」

「なんですか、桃子さん？」

「これまで怖くて聞けなかったことも、今なら聞ける気がした。」

「私で……よかつたんでしょうか？」

モテない、冴えない、そしてバリバリにオタクな私が、どうしてこんな素敵な男性と
結婚できたのか不思議でならないのだ。

結婚式まで挙げたのに、今さらその質問？ という感じだけど。今までは自分に自信
がなくて、素直に正面から聞けなかったのだ。

厳さんは仕事ができるだけでなく、プライベートでも思いやりがあって気配り上手で、
非の打ちどころのない人である。お付き合いしているときも、緊張して狼狽えてしまう
私をさりげなくフォローし、優しくリードしてくれた。

彼のようにハイスベックな人なら、もっと綺麗な女性だって選べたに違いない。私と
結婚してくれたのは一時の気の迷いなんじゃないか……なんて思えてくる。だって、出
会って一年と経たないうちに結婚したのだ。その可能性だってないと言い切れない気
がする。

地味で、目立たなくて、ファッションセンスにはからつきし自信なし。いつも無難な
服とメイクと髪型。一応、標準的な体型の範疇には入っているものの、バストはもう

ちよっとポリウムが欲しいし、ウエストのくびれも乏しい。おまけに油断するとぼこつとしちゃうお腹も、大き過ぎるヒップもコンプレックスだ。結婚が決まってから行つたダイエツトと、ブライダルエステのおかげで、今までの人生で一番、理想の体型に近いとはいえ、近いだけで理想じゃない。

しかも、容姿が平凡な上に——オタクなのだ。まあ、オタクなのはお見合い当日にパレしてしまっているんだけど、これから一緒に住むうちに『ここまでひどいとは思わなかった』なんて後悔されたらどうしよう!? そんな心配が引きも切らず襲ってくる。

「貴女だから、ですよ」

彼は甘くて優しい声で返してくれた。

次の瞬間、私はぎゅっと抱きしめられていた。

スーツを着た厳さんの広い胸に頬が触れる。トクトク、と微かに聞こえるのは彼の心臓の音だ。彼の腕の中はうっとりするほど心地よい。その一方で、本当に私はここにいるの？ 他の誰でもなく私でいいの？ そんなふうになが揺られてしまう。

「でも私なんてなんの取り柄もなくなくて。厳さんと全然釣り合わない……」

「バカなことを言わないでください」

大きな手が私の後頭部をゆっくり、ゆっくり撫でる。指で髪を梳かれるごとに、心配事なんてなにもかも忘れて、ただ甘えてしまいたいという気持ちが強くなる。

「素直でがんばり屋で、眩しいくらいひたむきで、そういうところに惹かれたんです。変に気取ったりしないし、少々慌てん坊なところも可愛らしい。それに、最初から

『私』を見てくれたこと……」

そこで言葉を区切り、彼は悪戯っぽく微笑した。

「それから、私を見ても怯えなかったことに幸せを感じました」

「怯えるなんて！ 絶対ありえませんか！ ……見惚れることはありますけど」

うっかり心の声までこぼれてしまった。慌てて口を押さえたけれど、出てしまった言葉は戻らない。恥ずかしくて頬が一気に熱くなった。ああ、もう！ 思ったことがつい口から出ちゃう癖、直したい。

「それは嬉しいな」

そう言った厳さんは嬉しそうだけれど、少し困ったような、そんな複雑な顔をしていた。はにかむ彼が可愛くて、胸がきゅんとした。

「ねえ、桃子さん。私もたびたび貴女に見惚れているんですよ。可愛くて目が離せなくなる」

まさか。そう言って否定しようと開きかけた唇は彼の指で押さえられてしまった。彼は最後まで聞いてほしいと言いたげな視線を送ってくる。

「こんなに強く、誰かと一緒にいたいと思ったのは初めてです。貴女のことを思うとね、

平静へいせいでいられなくなるんですよ。愛というのは本当に厄介やっかいなものです。この歳になつて初めて知りました。ねえ、桃子さん。これでは結婚したい理由として足りないですか？」

甘く熱いささやきを受けて、胸が壊れそうなくらい早鐘はやかねを打った。

なにか気の利いた愛の言葉を返せばいいのに、嬉しくて頭の中が真っ白でなにも思い浮かばない。私だって好きなのに。厳さんのことを思うと切なくて、何度も眠れない夜を過ごしたのに。

「あ……わ、たし……」

私の口は無意味に震えるだけ。思うように動かない舌がもどかしい。

「貴女は？ 貴女も、そう思ってた？」

彼の吐息が耳を掠かすめる。そしてうなじに熱い唇が触れた。

「あっ！」

初めての感覚に背中がぞくりと震える。耐えられなくて、声こゑが漏れてしまった。

答えを促うながすように、彼の唇はゆっくりと私のうなじから肩へと滑る。そのたびに甘い戦慄せんりつが背を走り、知らず知らずのうちに彼の手をつかんでいた。

「桃子さん？」

彼の吐息が肌にかかって、泣きたいくらい切ない。

「私も……厳さんが好き、です」

やっと絞り出した声は掠かすれていた。

「好きで、好きで……どうしようもないくらい、好き」

デートを重ねるたび、厳さんのことを知るたび、彼を好きな気持ちはどんどん膨ふくらんでいった。そうして気が付いたら、真剣な顔も、照れたような笑顔も、私をからかう楽しそうな顔も、彼の全部を独り占ひとめしたいと考えるようになった。

だからプロポーズされたときは嬉しくて……

「嬉しいですね。貴女の口から私に対する想いを、やっと聞けた気がする」

彼の言葉にどきりとする。恥ずかしさが先に立って、今まで自分の気持ちをきちんと伝えていなかったことに気が付いた。

お見合いのあとだって、プロポーズのときだって、厳さんから切り出してくれたのだ。私はただ「はい」と返事をしただけ。

「ごめんなさい！ 私……」

恥ずかしかったからなんて言い訳にもならない。こんな大事なことをおろそかにしていたのが申し訳なくて、血の気が引いた。

「いいですよ。貴女が私を憎にくからず思ってくれていることは、ちゃんと伝わっていましたから。すみません。今日は少し酔っていますみたいです。どうしても貴女の口から聞

きたくなつて、意地悪をしました」

「意地悪だなんて、そんなことないです！ 私が悪いっ……え？ ……わ!?」

言葉が唐突に途切れたのは、顎をつかまれてくいと横を向かされたから。

なにが起きるのか理解できないうちに、唇を塞がれた。一瞬遅れて、自分がキスされたことを理解した。

触れるだけの軽いキスだったのに、彼の体温が私の唇に移っている。けれど、それもすぐ消え去ってしまう。

彼とのキスはいつだつて心地よくて、そして少しだけ切なくなる。プロポーズを受けたとき、彼とした最初のキス——私にとってのファーストキス——からずっと、この甘さと切なさは変わらない。

名残惜しくて、自分の唇に指で触れた。その指を彼が取り、指先にもキスを降らせる。彼の唇が触れたところから溶けてしまふそうだ。

「私に、こういうことをされるのは嫌ですか？」

「まさか！」

全力で否定して、彼に向き直った。

「嬉しい、です……」

今度こそきちんと気持ち伝えずには、とがんばるが結局声は小さくなってしまっ

た。それを誤魔化すように、私は勢いよく顔を上げた。

「キ、キスするのさえ嫌な人と結婚なんてしません！」

キスを嫌がっていたと思われたくなくて強い口調で言う。すると彼はきよんとした顔をして、それからぷつと噴き出した。

「それもそうだ」

なにがそんなに彼のツボを突いたのかわからないけれど、彼は声を上げて愉快そうに笑った。そしてひとしきり笑ってから、ふつと真顔に戻って私の目をのぞき込む。真剣な顔なのに目には蠱惑的な光が浮かんでいて、私は動揺のあまり声を上げそうになった。かろうじて堪えたものの、喉の奥で「ひう」と変な音が鳴る。

厳さんは私の狼狽える様子を見て、ゆつくりと口角を上げた。彼の妖しい引力に心が吸い寄せられる。

「じゃあ、もつとしてもいいかな？」

「え？ ——ふ、んんっ」

彼の言ったことを理解するより先に、彼の顔がどんどん近付いて唇を塞がれた。優しいキスとともに、私の体はそつとベッドに横たえられた。

顔の両脇には彼の逞しい腕。退路を断つように囲い込まれて、緊張と期待と興奮が頭の中でせめぎ合う。ごくりと唾を呑み込むと、自分でも驚くほど大きな音がした。

至近距離で私を見下ろす厳さんの顔に、先ほどの笑みはない。真剣な表情の彼の顔は、照明を背にしているため影ができていて、なんだか淫靡だ。まるで違う人のように見えて心細くなった私は、手を伸ばして彼の頬に触れた。

途端に彼の指をぱくりと咥えた。柔らかい唇にはさまれた私の指先を、熱くぬめるものがちろりと掠める。

「あっ、んう……」

いきなり与えられた官能的な刺激に息が詰まる。

「桃子さん。——かまいませんか？」

「はい」

なにを？ とは聞かなかった。聞かなくても彼が言いたいことはわかったから。

いよいよだと思う気持ちと、不安と期待がない混ぜになって、体が小刻みに震えていた。

「嫌だと思ったら、遠慮なく言ってください」

「でも」

「私たちは夫婦になったんですよ？ 今日がダメでも、気長にやっていけばいいんです。

違いますか？」

「違い……ません」

切れ長の目が、驚くほど優しく細まった。そのことに安心して、全身から余計な力が抜けていく。

「では、今日のところは無理なくできるところまで、ね？」

穏やかな声に私はこくこくと頷いた。

それを合図に彼の手が私の頬に触れた。頬を緩やかに撫でた指はゆつくりと下に滑り、頰をつかむ。それと同時に彼の唇が下りてきて、私の唇と重なった。さっきの優しいキスと違い、熱がこもっていた。熱い唇が、私の唇を軽く食む。ついはまれるたびに、胸がきゅんと痛んだ。

「んっ……」

無意識のうちに鼻にかかった声が漏れていた。慌てて声を止めようとしたけれど、抑え方がわからない。このままキスを続けたら、もっと大きな声が出てしまいそう。それが恥ずかしくて彼の唇から逃れようとしたけれど、頰をつかまえられていて逃げられない。

「やっ……」

キスの合間に抗ったところ、彼は甘く低い声でささやいた。

「嫌ですか？」

「ちが……、声が……漏れて……恥ずかしいから」

だからもう少しお手柔らかに、と言いたかったのに。

「声を抑える必要なんてありませんよ。私は貴女の素直な声を聞きたい」
 そうささやくなり、彼はまた私の唇を塞いだ。

今度のキスは今までよりも深く荒々しい。唇を舌で舐められたり、そこに軽く歯を立てられたり。そのたびに体の奥に得体の知れない熱がたまって、眩暈がする。

キスと同時に、私の顎をつかんでいるのは反対の手が、私の腕や肩のあたりを優しく撫でてくれる。

優しい愛撫と徐々に深くなるキスに酔っていると、彼の手が私の胸に唐突に触れた。

「ん……あ……っ！」

突然の鋭い刺激に背がびくりと跳ねる。

喘ぐために開いた口腔に彼の舌がぬるりと侵入してきた。

——ディープキス。

知識では知っていたとはいえ、こんなに生々しい感触のものだとは思ってもいなかった。

彼の肉厚な舌は、私の口の中をゆっくりと蹂躪する。驚いて縮こまった私の舌を誘い出すように撫でたり、口腔内に官能のポイントを探すべく、上顎や歯列をゆっくりと愛撫したりする。

「んっ！ あっ……ん……ん……」

鼻にかかった甘え声が絶え間なく漏れる。こんな声を聞かれるのは恥ずかしいけれど、彼から与えられる刺激が気持ちよ過ぎて我慢できない。

気が付けば彼の巧みな誘導に負けて、自分から彼の舌に自分のそれを絡ませていた。

喘ぎ声に、ピチャピチャといやらしい水音が混じる。嘔下しきれなかった唾液が口の端からこぼれ落ちて、その跡が冷たく感じられた。

一方、彼の手はゆっくりと私の胸をまさぐっている。服の上からの愛撫は、初めこそ強い刺激に感じられたけれど、時間が経てば経つほどどかしく思えてきた。もっと強い刺激が欲しくて、じりじりする。どうしようもない焦燥に耐えられなくて、あさましいと思いつつ腰をくねらせた。そうしたら耐えられそうな気がしたのだ。

すると、動いた拍子に自分の体の中心がぬめっていることに気付いてしまった。ぬめっているだけでなく、小さな水音すら立った気がした。小さな小さな音だから、きつと彼には聞こえていない。そうは思うけれど、恥ずかしくていたたまれない。しかし、体の奥からやってくる衝動には逆らえなかった。

「厳さ……ん……もう」

キスの合間に懇願する。

「ええ、わかりました」

厳さんの冷静な声に、どきりとした。私はもうなにも考えられないくらい夢中なのに、彼はまだ余裕なんだ。そう思うと自分だけが先走っているようで怖い。

視線を感じて顔を上げると、厳さんが私をじっと見下ろしていた。息は少しも乱れず、表情も冷静さを失っていない。ただ、切れ長の鋭い目の奥には熱が見え隠れしていた。

彼の手が背中に回り、私のワンピースのファスナーを下ろす小さな音がした。すると感じるのは、解放感と心もとなさ。彼の手はファスナーを下ろし終わると、ゆっくりと動いて私の肩から衣服を滑らせた。

下着姿の自分を彼の前にさらすのが恥ずかしくて身をよじろうとする。途端に、彼の手が優しく私の肩を拘束した。

「どうして隠すんです？」

「だって、こんな……恥ずかしい、です」

アイボリーホワイトのワンピースは腰のあたりまで落ちてしまっていて、私の身を隠してくれない。特に美しくもない体を見られて恥ずかしく思わないわけがない。

「恥ずかしい？　なにが？」

「だ、って……心の準備が」

「心の準備？」

「スタイル、悪いから、こんな明るいところでさらすのは、ちょっと抵抗があって」

コンプレックスばかりの体を厳さんに見られちゃうのは、どうしても恥ずかしい。

「残念だな。もつとじっくり見たかったんですが。今日のところは貴女の望む通りになしよ。貴女に嫌われたくないですから、ね」

彼がベッドサイドへ手を伸ばすと、ゆっくりと部屋の明かりが落ちた。極力抑えられたい明るさに、我知らず、ほう、と安堵のため息が漏れる。

「でも、そのうちちゃんと見せてください。私は貴女のすべてを目に焼き付けたいの。——ねえ、桃子さん、貴女は貴女が思う以上に綺麗ですよ」

「そ、んな……っん！」

否定しようとした口は、彼の唇で塞がれた。くちやくちやと音を立てて粘膜を舐られたあと、敏感になった唇を甘噛みされる。まるで私の言おうとしたことを咎めるように攻めてくる。そうされると、腰の奥がじんんと熱く痺れた。

「今日だって貴女があんまり綺麗だから、誰にも見せたくなくてね。式も披露宴も二次会も三次会も全部すっぱかして、貴女とこういうことをしたくて仕方がなかったんですよ。その衝動を抑えるのにどれだけ苦労したか」

厳さんはそう言いながら、困ったような、それでいて艶っぽい微笑みを浮かべる。なんとという爆弾発言。彼の放った甘い言葉が私の理性をじくじくと奪っていく。

「あ……厳さ……、んああ……」

彼の指が私の喉から胸の膨らみへと滑る。ゆっくりとした動きは、まるでその行為の淫猥さを見せつけているようだ。恥ずかしいと思うのに、触れられた場所が快感を訴える。「こんなに綺麗なのに……。隠すなんてもったいない」

艶にまみれた声で、笑いを含みつつささやく。

「あっ！ んっ、んんん……！」

彼が首筋を甘く噛みながら言うので、背筋がぞくぞくと震えた。体の奥の熾火がさらに熱をもつ。

荒い息を繰り返す私の肌の上を、彼の唇がじらすように下りていった。

唇が向かった先には、先ほどの愛撫で硬く尖った頂。

その形を確かめるように、彼の舌がゆっくりとなぞった。

「ひうー！」

口に含まれて転がされると絶え間なく快感が襲ってきて、シーツに爪を立てて耐えることしかできない。

もう一方の膨らみは彼の手で揉みしだかれていて、そこからも甘い刺激が湧き起きている。

自分がどんな顔をしているのか、どんな声を上げているのか、どんな風に身をくねらせているのか、考える余裕もなく、ただただ彼の指と唇によって乱された。
「……っは……あ……んっ……やっ！」

「嫌じゃないでしょう？ こんなにここを硬くして」

「んっ！ あ、ああっ！ そこ、やあ……」

硬くしこった胸の先端を指できゅっとなぞられて、腰がびくりと跳ねた。痛いはずなのに、気持ちいい。

なんで？ どうして？ 頭が混乱する。

しんと静まった部屋に、卑猥な喘ぎと、彼が私の胸を舐るたびに起こるびちゃびちゃという音だけが響く。

想像していたより、ずっと生々しい音と快感。気持ちいいと思う反面、戸惑いも感じる。自分が自分でなくなるような感覚に襲われながらも、徐々に快感は高まっていく。体は心を置いてきぼりにして、性急にもっと強い刺激を求める。

彼の愛撫に酔い、そんな自分が怖くなり、それでもやっぱり快感には抗えなくて、身悶える。

胸への刺激はとて甘く、ときに意地悪で、私をひどく翻弄していた。けれど……

——なにかが足りない。
本能を象徴する場所が焦燥を訴えていた。お腹の奥が熱くて苦しくて、どうしようも

ないくらい切ない。

その切なさふしちろみは太腿ふしちろみをすり合わせても、体をよじつても消えることはなくて、逆に肥大ひだいしていく。

辛くて、無意識のうちに厳さんの腕を強くつかんでいた。

「もう、そろそろ……いいかな」

眩くらきとともに、彼の指が私の腹を這はい、その下へと伸びた。

脚の付け根にある割れ目を、下着の上から軽くひと撫なでされる。同時に、くち、と粘着質な水音が耳に届いた。

「あう！」

腰がびくりと大きく跳ねる。

「や、だ！　そこ、ダメえ！」

過ぎた快感は恐怖を呼ぶ。

下着の上から撫なでられただけでこんなふうになっちゃうなんて、この先を知るのが怖い。

「大丈夫。落ち着いて」

耳元でささやきながら、彼は私のそこにあてがった指をゆっくりと動かした。聞くに堪たえない水音がして泣きたくなる。

「あ……！　んっ、あ、ああ！」

彼の指が何度か往復しているうちに、快感のやりすごし方を体が覚え始めた。

「そう、いい子だ。怖くない」

耳元で繰り返しささやかれる声に、心も落ち着いていく。

「はあ……。……厳、さ……。大丈夫……」

しばらくして、私の恐怖心が消えたと悟さとった彼は、私の下着をゆっくりと脱がせた。生まれたままの姿をさらすのは恥ずかしい。けれど、それ以上に彼と一つになりたい気持ちきもちが大きくなっていった。

「少しづつ慣らしましょう。痛かったら言ってください」

額ひたいに汗をうつつすらとにじませた彼が、氣遣うように私の顔をのぞき込んできた。さつきより少し赤くなった頬と情熱的な目に、彼の興奮を感じ取って嬉しくなる。

——厳さんも、私のことを欲しいと思ってくれてるんだ……！

「はい。……んっ！」

彼の指が亀裂きれつに触れる。数回、濡れたそこをくすぐったあと、ゆっくりと中に分け入ってきた。じゅぶ、と卑猥ひわいな音が立つ。恥ずかしいくらいに濡れていた。けれどそのおかげか、痛みはほとんどない。少しちりっとしたただけだ。

「あ……ああっ！　んっ、や、やあ……」

それより大きかったのは異物感だ。自分の中に、自分でないものがある感覚。違和感があり、消えたはずの恐怖心が蘇^{よみがえ}ってくる。

「あ、やつ、ああああ！」

ゆつくりと、しかし確実に奥へと侵入してくる彼の指。

根元まで入りきった指で内壁を撫^なでられた瞬間、恐ろしいくらい甘い戦慄^{せんりつ}が背筋を駆け抜けた。それはもう錯乱^{さくらん}するくらい強烈で、それまで抑^{おさ}えていた恐怖心が爆発した。

「んっ、ああああああ！ いや！ もう、ダメえ！」

「桃子さん!？」

「や、もう、怖いの！」

怖いと口にしたのが呼び水になったのか、涙がポロポロとこぼれた。不安と焦燥^{しょうそう}と、期待と、異物感と、小さな痛みと、そして耐^たえられそうにもないほどの強い快感。全部がごっちゃになって、混乱した。

これ以上の官能を知ったら自分じゃなくなる気がした。もっと先を知りたい気持ちもあつたけれど、それより恐怖のほうが勝^{まさ}っていた。この先の快感を知ったら、私はどうなってしまうの？

「ご、めん……なさ……い。自分が、自分じゃなくなるみたいで……その、どうしても怖くて……ごめんなさい。ごめんなさい。ごめ……」

「そんなに謝らないで」

泣きじゃくる私を抱き起こした彼は、そっと抱きしめてくれた。広い胸に包まれていく安心感で、さらに涙が止まらなくなる。

「で、でも、わた……私……痛かったわけでも……厳さんが怖かったわけでもなく……」

「いいから。気に病^やまないで。痛かったんじゃないならよかった。さつきも言ったでしょう。ゆつくりでいいんです。ゆつくり心の準備をして、慣れていけばいい。ね？」

私の頭を優しく撫^なでながら、厳さんは大丈夫だ、気に病^やむなと繰り返し返す。

その優しさが嬉しくて、自分が情けなくて、子どものようにわんわんと声を上げて泣いてしまった。けれども彼は呆^{あき}れもせず、私が泣き疲れて寝入るまでずっと付き合ってくれた。



そんな申し訳ない初夜から一か月。

ここは私たちが新婚生活を始めたマンション。そして現在の時刻は午前七時三十分である。南向きのリビングに、燦々^{さんさん}と朝陽が差し込んでいる。

数か月前の私にとつては起床時間。今の私にとつては夫、厳さんの出勤時間だ。彼は、彼の両親が共同経営する弁護士事務所働いている。事務所は家から少し離れているため、朝はいつも厳さんのほうが早く出るのだ。

お見送りのために玄関に立った私は、彼が靴を履くのを眺めていた。ほどなく彼はピカピカに磨かれた革靴を履き、かがんでいた体をまっすぐに伸ばす。すると私は首が痛くなるくらい見上げないと目を合わせられない。結婚式の衣装をオーダーメイドする際に聞いたところによると、厳さんの身長は百八十八センチらしいので、私とはちょうど三十七センチ差だ。

一分の隙もなく整えられた髪に、細いメタルフレームの眼鏡をかけ、仕立てのいいダークグレーのスーツに身を包んだ彼は威厳に満ちている。

ちょっと迫力があり過ぎて、初見では怖いと思う人もいるかもしれないけど、本当はとても穏やかで優しい人なのだ。

「行つてきます。帰りは遅くならない予定です。事務所を出るときに電話かメールを入れます」

「はい！ 行つてらっしゃいませっ」

勢いよく返事してから、『ませ』はないよね、と自分に呆れてうなだれた。まるで店員さんがお客さんと話すときの口調みたいだもの。

失敗したと思つたのが顔に出ているのだろうか。厳さんは励ますように私の頭をポンポンと叩く。視線を上げたところ、彼の優しい眼差しにぶつかった。微笑む彼につられて私も笑うと、それでいいと言ふみたいに頷く。

それから彼は「では」と短く告げて身を翻した。が、玄関のドアノブに手をかけた瞬間、ぴたりと動きを止める。

どうしたのかな？ と私が首をかしげると同時に、彼はくるりとこちらに向き直つた。

「忘れ物をしました」

手にしたビジネスバッグを床に置きながら言う。靴を脱いで自分で行くつもりなのかな？ でも、彼が靴を脱いで探しに行つて、また戻つてきて靴を履いて……って面倒だよな。私が行くほうが早い。

「忘れ物ってなんですか？ どこに置いたか覚え……なっ!?」

尋ねながら部屋のほうへ戻ろうとした途端、厳さんの腕が腰に巻きついた。次の瞬間、ぐいっと引き寄せられ、背中が彼と密着する。

「なっ、なななな？」

訳がわからず混乱している私の鼻先を、彼の香りが微かにくすぐつた。

うしろから抱きすくめられたらしいということは理解したんだけど、なんでそうさ

れているかはわからない。

あれ？ 厳さんは忘れ物をしたんだよね？ なんでこんなことになってるの？ って
いうか近くないですか!?

「いつ、厳さん？ あの……忘れ物は……？」

「ええ、ですから貴女に逃げられては困るんです」
「逃げる？ 困る？」

ますます意味がわからなくておうむ返しに尋ねると、彼は腕をほどいて私をくると
反転させた。至近距離で向かい合わせる格好。しかも彼の両手は私の肩に乗っている。

こっ、これはどういうシチュエーションなのかなっ!?

えっ、えっ、これって二次元の場合だとキスシーンに繋がる感じなんですけど……混
乱のあまり、オタク的な妄想に意識が逃げてしまった。

まさかね。生真面目な厳さんに限って朝からそんなことしな……って！ えー！ ま
さか、まさか！

私が目を白黒させているのかまわず、厳さんの顔がどんどん近づいてくる。伏せら
れた目を長いまつげが縁取っているのが目に飛び込んできた。そんなところに色気を感じ
て、胸がどきりと大きく跳ねる。

「厳さ……」

うわずった声で彼の名前を呼んだのとほぼ同時に、左の頬に柔らかくて温かいものが
触れ、すぐに離れた。

まさかのまさか。これは……！

「キ、キスう!？」

動揺のあまり素っ頓狂な声が出た。

「嫌でしたか？」

「まさか!？」

困ったように聞かれて、私はブンブンと首を横に振った。嫌だなんて思うわけがない。
ただちよつと動揺しただけだ。

「よかった。では」

「はいっ！ 行つてらっしゃい」

彼は、なにこともなかったかのように冷静な顔で出かけていった。

残された私は、彼の唇が触れた頬を押さえながら、へなへなとその場にへたり込む。
行ってきますのキスぐらい、新婚だったらどこの夫婦でもすることだろう。

でも、でも！ 私には少々刺激が強過ぎる。

なぜなら、彼に大迷惑をかけたあの初夜以来、彼と私の新婚生活はとても清いもので
ございまして。さっきのキスが最大接近だったりするのです。動揺すると言うほうが

無理です。

そういうわけなので、朝っぱらからのこの不意打ちは衝撃だった。まだ動悸が治まらない。

こんなことならオタク活動ばかりしてないで、もっと恋愛経験を積んでおけばよかったかな……と不毛な後悔が湧いた。同時に、いざというときパニックになる、自分の不器用さと焦りやすい性格にも絶望する。

——私はいわゆるオタクってやつだ。物心ついた頃にはすでにオタクの片鱗があり（両親談）、小学校卒業時にはしつかりオタク女子化していた。小学校の高学年と言えばクラスの女子たちがキヤーカーキヤーカー言いながら少女漫画を回し読みしていた頃。でも、私は某格闘漫画にハマっていた。極限状態のバトルと男の友情に感動し、寝る間も惜しんで情熱を傾けたものだ。

それは中学に入学しても変わらずで……。周りの女子たちが『〇組の△君が格好いい！』『三年の□先輩ステキ！』なんて言い合っているのに『そーかもねー』なんて適当に相槌を打ちつつ、某スポーツ漫画の主人公とライバルの、熱くて固い絆に血をたぎらせた。

情熱の赴くままに二次創作を手にとったからはアンストッパブルだったよね。それ以来、アニメ、ゲームに漫画に小説、BLだって男女の恋愛だってなんでもどんとこい、

明るいコメディから心が削れそうになるダークな話まで美味しくいただきます！ という雑食さを発揮。高校生になっても、短大に入っても、社会人になってもおられることなく、ずーっとオタクライフを満喫していた。とはいえ、周りの目は気になったから、隠れオタクを通してきたんだけど。

そんな私のリアルな恋愛事情はというと、合コンに誘われるときはネタ要員が数合わせ。親しくしていた男の人も少なく、美貌も恋愛スキルもない私に言い寄ってきてくれる人なんていなかった。

恋人ができないのは少し寂しいけれど、でも私には二次元がある！ とオタクライフを満喫していたのだ。そもそも二次元より優先したいと思うような男の人と出会わなかったしね。

だが、そんなふうのんびりしていたのも二十三歳くらいまでのこと。その頃から友人たちがちらほらと結婚し始めたのである。ちよつとマズいかなあと焦り始めたものの、男女交際などまったく未経験な私が、急に恋人を作れるわけがない。

もうこれは一生おひとりさまを覚悟したほうがいいんじゃないかと思っていた。

恋人いない歴、イコール年齢。その記録を生涯更新し続ける未来を想像し始めた二十五歳の夏……一件のお見合い話が舞い込んだ。

相手の男性のハイスベックさに驚きつつ、紹介してくださった方の顔を潰さないため

に、とりあえず向かったお見合いの席。そこで私はすっかり恋をしてしまったのである。久瀬厳さんに。

もっとビックリなのが、その恋が実ってしまったことだ。

顔よし、スタイルよし、性格よし、将来を有望視されている弁護士さんと、オタクで可愛くもなければ頭が切れるわけでもない、どこからどう見ても地味な私。そんな私たちが、まさか共白髪を誓うことになるなんて！

しかも厳さんは、恋愛経験の乏しさゆえに、思っていることを上手く言葉にできない私を、根気強く見守ってくれている……んだと思う。初夜から今に至る夫婦生活（主に夜の、が付くほうね）に関するあれこれは、その最たる例だ。恥ずかしがってばかりではダメに決まっている。わかっているけど、勇気ってなかなか出せないものなんだよね。だって、取った行動がますます事態を悪化させたら？ そう思うと怖くて怖くて。

「でも、いつまでもこのままっていうのも……」

結婚して一か月、そろそろ体の関係を持ちたいと思う。

心身ともにもっと厳さんと打ちとけて、本当の夫婦になりたい。厳さんと自分の間にある壁のようなものを壊したい。

厳さんは親しい友だちやご両親とは砕けた口調で話すのに、私に対してはいまだに敬語だ。それってあんまり親しい間柄だと思われていないからじゃない？ 一線を越えた

関係になれば親近感を抱いて、私に対しても敬語をやめてくれるんじゃないかと考えている。

でも、初夜でやらかしてしまったから、もうそんな機会はないのかな……

「ああ、もう！ なんてあんなことしちゃったんだろ……」

あんなことをしてかさなかつたら、こんなに悩まなくてすんだのに！ 一か月前の自分を殴りたい。思いきり殴りつけて正座させて説教したい。いくら未経験だからってさ、あんなにパニックを起こすことないじゃない。仮にも二十六にもなった大の大人がすることじゃなかったと思う。

「もう、私のバカバカバカバカー！」

思いつき拒んじやった私が全面的に悪い。あれだけ拒絶されたら誰だって、次に誘うのに二の足を踏むよね!? だから、次は私から誘うべきなのはわかっているんだけど……

「ああああ、どうしよう！」

両手を床についてじっと見つめる。

「はあ……。でも、いつまでも轟沈してるわけにもいかないよね……」

なんといつても平日の朝は忙しいのだ。

よっこらせ、と気合いを入れて立ち上がった。

落ち込む気持ちを引きずりながら、腕まくりをしてキッチンへ向かう。
「ちゃちゃっとお弁当、作っちゃわなきゃ」

お弁当作りといってもそんなにたいしたことをするわけではない。昨夜の晩ご飯と今朝の残り物を適当に詰めて終わり。厳さんのお弁当も作るならもっときちんとするけど、自分のだけだからこの程度で充分。

厳さんは昼食の時間も場所も不規則だから、お弁当はいらないと言われてる。会食も月に何度かあるらしい。

もしかして気を使ってくれてるだけじゃ？ と思ったりもするんだけど、勝手に作って押し付けるのは気が引けて、結局お弁当作りはしていない。

外食ばかりじゃ野菜不足になるんじゃないかという心配もあるけれど、厳さんのことだからそのあたりは自己管理していそう。念のため朝と夕はなるべく多くの種類の野菜がとれるように、極力努力している。

というわけで、漫画やアニメでよく見かける、夫が忘れたお弁当を妻が職場に届けて……というシチュエーションにはならなそう。お弁当は関係ないけど、妻が夫の職場を訪れると言えば、家に忘れた重要書類を届けるってシチュもあるよね。だけど、抜かりのない厳さんが大事な書類を忘れるわけもない。

夫婦になつたら一度は体験してみたかったイベントが行えそうにないのは残念だけど、

厳さんが頼もしいってことだから贅沢ぜいたくは言えない。

でも、働いている厳さんの姿を見たいな……

そうだ！ 厳さんが内勤の日をあらかじめ聞いておいて、一緒にランチすればいいんだ。

でも、でも！ 厳さんは私とランチに出かけたいなんて思っていないかも……いや、きつとそんなことないよね!?

ああ、せめて昼食くらい、自信を持ってお誘いできるようにになりたい。厳さんにもっと近付きたいけど、あの初夜のことや頭に浮かぶと、途端に尻込みしてしまう。夫婦としてちゃんと体も繋がれたら、素直に思っていることを話せるようになるのかな。

どんだん気持ち沈んでいくが、落ち込んでいても出勤の時間はせまってくる。私は慌あわてて荷物をまとめた。

「行ってきます！」

無人の室内に向かって声をかけつつ玄関を飛び出し、慌あわただしく施錠せじょうした。



私の勤め先は電車でひと駅なので、通勤にはドアトゥドアで三十分もかからない。駅

から徒歩三分の、外観がなかなかお洒落なビルの五階にある。

冊子やチラシ、フライヤー、同人誌の印刷、製本を請け負う印刷会社の東京営業所。私はそこで働いている。

オタクな私としては、この上もなく理想の職場。同僚もみんなオタクで話が合うし、なによりオタクを隠さなくていいのが幸せだ。

ちなみに私がオタバレを恐れるようになったのは、アニメと漫画に目覚めた小学生時代から。クラスの女の子に、とあるアニメについてちょっぴり熱く語ってみたら、翌日から遠巻きにされたことがあった。それ以来、中学校でも高校でも短大でも、とにかくオタバレしないようにと努力してきたのだが、なかなか大変な日々だった。十数年、そうやってなんとかやってきたのに、厳さんにはお見合いしたその日にオタバレ。

いや、正確には隠しきれないと観念して、自分から打ち明けたのだけれど……

それでも厳さんは、ありのままの私を受け入れてくれて……今に至るといわけだ。

こんなによくしてもらっているのに、恥ずかしいからってグズグズしていて、私は本当にダメだなあ。自分に対してうんざりする。

なんて考えているうちに、事務所の前へ到着していた。

「悩むのは中断、中断！」

仕事とプライベートはきちんと分けなくちゃ。頬をぺしっと叩いて、気持ちを切り替

えた。

「おはようございますーす！」

努めて元氣よくドアを開けた。

「あつ、さく……じゃなくって久瀬さん！ おはようございます」

もうすでに出社していたアルバイトの江藤優里奈ちゃんが振り向いた。彼女は所内のみんなから、親しみを込めてユリちゃんと呼ばれている。コスプレイヤーでもある彼女はいつもお洒落で可愛い。レイヤーさんの中には陽に焼けるのを嫌って、一年中長袖を着ている子もいるらしいけど、彼女はあまり気にしていないようだ。今日の彼女の服装はベージュ色のジョーゼットの半袖ブラウスに、紺色のふんわりした膝丈プリーツスカート。ウエストの大きなリボンがアクセントになっていて、清楚で可愛い。

「ユリちゃん、おはよー！ 今日も……」

可愛いね、と言おうとして、それってなんかセクハラっぽくないか？ と思いをめぐんだ。尻切れトンボになってしまった言葉の先を探して、当たり障りのなさそうなことを咄嗟に口に乗せた。

「……早いね。まだ始業まで三十分以上あるのに」

「え？ そうですか？ いつも通りですよ」

不思議そうな顔をされてしまった。確かにユリちゃんはいつも早く来ているので、今

日だけが特別じゃない。

「あ、そ、そうだよね」

あはは、と笑って誤魔化したら、ますます不思議がられた。

「久瀬さん、どうかしたんですか？　ちよっと変ですよ」

お客さんの受付カウンターを拭いていた手を止めて、じっと私を見る。そんな大きく綺麗な目で見つめられるとドキドキしてしまう。

小さな顔に、ぶつくりした可愛い唇。スタイルも抜群で、話は面白いし、気配りも上手。いいなあ。私もユリちゃんみたいになりたいという羨望の気持ちが湧いてくる。

彼女みたいに可愛くて話も上手だったら……今の厳さんと私の関係は違っていただろうか？

それこそ、結婚式の夜みたいな失態も演じなくて済んだのかな。いつか彼に嫌われるかも、なんて悩む必要もなかったのかも？　嫌な考えがあとからあとから溢れてくる。

ユリちゃんを見てこんなことを考えるなんて、私は嫌なヤツだ。ああダメだなあ。

ネガティブな思考を切り変えようと、ユリちゃんに向き直った。

「へ、変って……どこが？」

「いや、具体的にはわからないですけど、でも久瀬さんの様子が変わるのは私にもわかります。なにか困ったことがあったんですか？」

ユリちゃんの『困ったこと』という言葉を聞いた瞬間、今朝の一件をぼぼん！　と思いついてしまった。頬に触れた厳さんの唇の温かさとか柔らかさとか、私の耳元に微かにかかった吐息とか！

見る間に頬が熱くなった。すると私をじっと見ていたユリちゃんが、なにかを察したようににやりと笑った。おそらく私の顔は、ゆで上がったタコみたいに真っ赤になっているんだろう。

「なっ、なにを言い出すの、ユリちゃん！　なにもないってば！　いつも通り！」

「やだ、久瀬さん、そんなに恥ずかしがらなくてもいいじゃないですか。よかった、そういう幸せ過ぎる理由ならいいんです。痴漢とか変質者に遭遇したんじゃないかと心配したんですよ」

いや、痴漢とか変質者とかは私みたいな冴えないヤツを選ばないと思うな！　むしろユリちゃんのほうが狙われそうで心配だ！

「そうですね、そうですね、御馳走様です」

彼女は鼻歌まで歌いだしそうなくらい楽しげだ。

「ちよっと、ユリちゃん！　ひとりでなに納得してるの！　なにもないってば！」

「なにもないってことはないでしょう。新婚さんなんですから！　旦那さんって夜はどんな感じですか？　結婚式で見たときはすごく優しそうでしたけど、ぐいぐい攻め

られちゃったりして!」

前のめりになって聞いてくるユリちゃんに、私はなにも答えられない。

新婚生活一か月にして、頬にキスされるのが一大事だなんて……。情けなさ過ぎて絶対言えない。

「なつ……ふっ、普通だよ……」

目を逸らしてほそほそ答える。そんな私を見ているユリちゃんは上機嫌だ。

「はいはい。久瀬さんが恥ずかしがり屋さんなのは知ってます」

彼女はそう言って、にやにやしなからカウンター拭きを再開した。

ユリちゃんよりは私のほうがかなり年上なはずだけれど、勝てる気がしない……。私の経験値が圧倒的に足りないのだ。

ユリちゃんが当たり前のように夜の話をしてきたことで、不安と焦りが加速する。やっぱり、今のままじゃ夫婦って言えないのかな……

厳さんの優しさに甘えてばかりいてはダメだ。自分で引き起こした失敗なのだから、自分でなんとかしなきゃ。

「でも、どうしたらいいんだろう……?」

答えは見つからないまま、一日が過ぎていった。

立ち読みサンプル はここまで

お出かけ前のキスは、あの日以降毎日厳さんのリードで行われて、近頃では習慣化した。

毎朝、頬に軽くキスされるだけでとろけそうな幸せを感じる反面、日ごとに焦りが募る。

仕事を終えて帰宅した私は、リビングのソファに座ってあれこれ考えていた。厳さんの帰宅予定時刻まであと二時間。夕飯の仕度はもう済んだので、思う存分、考え事ができる。

——行ってきますのキスをするようになってから、厳さんに接近する回数は確かに増えたけど、夜の彼は相変わらず紳士的な距離を崩さない。

厳さんは私の心の準備ができるまで待つてくれてるのだと思う。

私はどういうと、心の準備はできている……はず。でも、どうやって誘えばいいのかわからなくてなにもできないでいる。

しかし、キスが増えたことで『彼に嫌われてる?』という心配は減ってきたし、今度は私がんばらなくちゃ!

よし! ここは私から厳さんにアプローチするしかない! そう。私から誘うのだ